

第9回「電話をかける勇気～家族への思い～」

施設の事務室にある白い電話。利用者の皆さんにとって、それは家族とつながる大切な架け橋でした。しかし、けんじさん（仮名・27歳男性）にとって、その電話は少し特別な存在でした。

けんじさんは中程度の知的障害があり、話すことはできるものの、電話での会話がとても苦手でした。相手の顔が見えない電話では、言いたいことが上手く伝えられず、いつも職員に頼んで家族に連絡を取ってもらっていました。「お母さんに電話したい」と職員に伝えると、職員が代わりに電話をかけ、けんじさんは受話器を受け取って短い会話をするだけでした。

家族との連絡は週に一度程度でしたが、けんじさんは家族をとても大切に思っていました。特にお母さんことを心配しており、「お母さん、元気かな」「風邪ひいてないかな」と職員によく話していました。お母さんも、けんじさんをとても愛しており、電話の度に「元気でやっているか」「困ったことはないか」と心配してくれていました。

担当の佐々木職員は、けんじさんが自分で電話をかけられるようになれば、家族との絆がより深まるのではないかと考えていました。しかし、けんじさんは「電話、難しい」「できない」と言って、なかなか挑戦しようとしませんでした。

ある日、けんじさんが「お母さんの誕生日、来週」と教えてくれました。「お母さんに『おめでとう』って言いたい」と話すけんじさんの表情には、いつも以上に温かい愛情が込められていました。佐々木職員は「それなら、けんじさんが自分で電話をかけて、お母さんに直接『おめでとう』を言えたら素敵ですね」と提案しました。

けんじさんは最初、「無理、できない」と首を振りましたが、「お母さんに直接伝えたい」という気持ちは強く、「やってみる」と小さく答えました。佐々木職員は「大丈夫です。一緒に練習しましょう」と励ました。

まず、電話のかけ方の練習から始めました。受話器を取り、番号を押し、相手が出たら何を言うか。けんじさんは一つ一つの手順をメモに書き、何度も声に出して練習しました。

「もしもし、けんじです。お母さんいますか？」という基本的な挨拶から始めました。

最初の練習では、けんじさんの声は震えていました。緊張で番号を間違えて押してしまったり、何を言うか忘れてしまったりしましたが、佐々木職員は根気強く付き添いました。

「大丈夫、ゆっくりで構いません。お母さんはけんじさんの声を聞けるだけで喜んでくれますよ」と励まし続けました。

練習を重ねるうちに、けんじさんの自信が少しずつついてきました。施設内の内線電話を使って、他の職員と電話の練習をしたり、人形を相手に電話をかける真似をしたりしました。「もしもし」と言う時の声も、だんだんはっきりしてきました。

そして、お母さんの誕生日の前日。けんじさんは「明日、頑張る」と決意を込めて言いました。当日の朝、けんじさんはいつもより早く施設に来て、「今日、電話する」と職員に報告しました。その表情には緊張と同時に、強い決意が込められていました。

午後、ついに電話をかける時間がやってきました。けんじさんは深呼吸をしながら受話器を取り、練習通りに番号を押しました。コール音が鳴ると、けんじさんの手は少し震えていましたが、最後まで諦めませんでした。

「はい、田中です」お母さんの懐かしい声が聞こえてきました。けんじさんは一瞬言葉に詰まりましたが、「もしもし、けんじです」と何とか声を出しました。お母さんは「けんじ？ どうしたの？」と驚いた様子でした。

「お母さん、お誕生日おめでとう」。けんじさんが練習通りに言うと、電話の向こうからお母さんの感動の声が聞こえてきました。「けんじが自分で電話してくれたの？ ありがとう、とても嬉しいわ」。お母さんの喜びの声を聞いて、けんじさんの顔にも大きな笑顔が浮かびました。

その後の会話では、けんじさんは「元気だよ」「野菜作り頑張ってる」「お母さんも元気？」など、普段以上にたくさん話すことができました。電話を切った後、けんじさんは「できた！ お母さん、喜んでた！」と嬉しそうに報告しました。

この成功体験をきっかけに、けんじさんは定期的に自分で家族に電話をかけるようになりました。最初は短い会話でしたが、だんだんと長く話せるようになり、日常の出来事や気持ちを家族に伝えることができるようになりました。

お父さんからも「けんじが自分で電話をかけてくれるようになって、本当に嬉しいです。成長を感じます」という感謝の言葉をいただきました。お母さんも「電話で話すけんじの声が、以前よりもしっかりとしています。自信がついたんですね」と喜んでいました。

ある日、けんじさんから「妹の結婚式の話、聞いた。おめでとうって言えた」という報告がありました。家族の大切な節目にも、自分の言葉で気持ちを伝えられるようになったけんじさん。その成長ぶりに、職員一同も感動しました。

最近では、けんじさんは他の利用者さんが家族に電話をかけるときのお手伝いもするようになりました。「最初は怖いけど、大丈夫だよ。家族は待ってるから」と励ましの言葉をかけています。

けんじさんの物語は、勇気を持って一步踏み出すことの大切さを教えてくれます。電話をかけるという小さな挑戦が、家族との絆を深め、自信と自立心を育むきっかけとなりました。

今日も、けんじさんは週に一度の電話の時間を楽しみにしています。受話器を取る手に迷いはなく、家族への愛情に満ちた声で「もしもし」と言う姿は、成長の証そのものです。家族への思いが、けんじさんに新しい力を与えてくれたのです。